

しも の はる い せき
下 ノ 原 遺 跡

福岡県筑紫野市大字下見所在遺跡の調査

筑紫野市文化財調査報告書

第53集

1997

筑紫野市教育委員会

下ノ原遺跡

筑紫野市大字下見所在遺跡の調査

序

筑紫野市は古くは北部九州沿岸と九州内陸部を結ぶ交通の中継地として栄え、また現在では福岡市に比較的に近いために、ベッドタウンとして開発が進んでいます。

当市は、装飾古墳で有名な五郎山古墳をはじめ、大宰府関連の遺跡も多く、市内全域に各時代の様々な遺構が眠っています。

しかし、このように先人が築いてきた貴重な文化遺産は、地域の大きな変化の中で開発により多くが消えていく現状であります。この歴史的遺産を少しでも後世に残し、活用していくことが、私共の役割であり、今後の課題でもあります。

今回の発掘調査並びに報告書作成に当たって、ご協力をいただきました方々につきまして心より厚く御礼申し上げますと共に、今回の成果が郷土の文化財に対する関心を深める縁ともなれば幸甚に存ずる次第でございます。

平成9年3月31日

筑紫野市教育委員会
教育長 永渕 正敏

例 言

1. 本書は平成7年度に実施した筑紫野市大字下見188-1他に所在する下ノ原遺跡発掘調査の報告書である。
2. 今回の調査は筑紫野市教育委員会が筑紫野市都市整備部住環境整備課より執行委任を受けて行ったものである。
3. 現地での発掘に係わる実測、写真撮影、出土遺物の実測は藤尾薫が担当し、更に写真測量、空中写真を国際航業株式会社に、出土遺物の写真撮影をフォトハウスオカにそれぞれ委託した。
4. 製図は奥村俊久・藤尾が行った。
5. 本書の執筆・編集は奥村の指導のもと藤尾が行った。

なお、この報告書作成にあたって、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 寺崎裕助氏、長野県飯山市教育委員会 望月静雄氏、三重県嬉野町歴史資料館 和気清章氏、熊本市教育委員会 網田龍生氏、太宰府市教育委員会、筑後市教育委員会 柴田剛氏より貴重な資料を提示していただいた。

本文目次

調査に至る経過	1
立地と環境	2
調査の概要	5

挿図目次

Fig 1 周辺遺跡分布地図 (S=1/25,000)	3
Fig 2 下ノ原遺跡位置図 (S=1/5,000)	4
Fig 3 SK 1 土壌実測図 (S=1/10)	5
Fig 4 SK 1 土壌出土遺物 (S=1/4)	6
Fig 5 SK 2 土壌出土遺物 (S=1/4)	6

図版目次

図版 1 下ノ原遺跡Ⅱ区空中写真 (上空より)	
下ノ原遺跡Ⅰ区空中写真 (南西より)	
図版 2 SK 1 土壌 (西より)	
1 SK 1 土壌出土遺物 1	
2 SK 1 土壌出土遺物 2	
3 SK 2 土壌出土遺物	
4 表採資料	

付図

下ノ原遺跡遺構配置図 (S=1/200)	
----------------------	--

I 調査に至る経過

平成6年8月8日、筑紫野市から筑紫野市教育委員会に筑紫野市大字下見の小集落改廃事業に伴う埋蔵文化財についての協議願いがあった。市教育委員会は現地を踏査した結果、埋蔵文化財が包蔵されている可能性があるため、試掘調査が必要である旨の協議を行った。それを基に平成6年度に新開地区、平成7年度に新開地区と下見地区の試掘調査を実施することとなった。この調査の結果、新開地区に遺構が検出された。筑紫野市都市整備部住環境整備課と筑紫野市教育委員会は協議を行い、遺跡の確認された部分に係る道路建設について発掘調査を実施することで合意した。よって平成7年7月5日に筑紫野市から文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法第57条の3第1項）が行われ、同年7月26日付けで住環境整備課と筑紫野市教育委員会は「筑紫野市下見2小集落地区改廃事業地内平成7年度文化財調査事務委任協議書」を締結し、筑紫野市教育委員会が筑紫野市から予算の執行委任を受けて発掘調査を実施することとなった。同年7月27日に市教育委員会は埋蔵文化財発掘調査の通知（文化財保護法第98条の2第1項）を行い、発掘調査を同年8月1日から同年9月20日まで実施した。整理作業は平成8年度に行った。

調査組織については下記のとおりである。

総 括	教 育 長	永 淵 正敏
	教 育 部 長	永 田 晋一
	社会教育課 課 長	岡 部 隆充
(平成7年度)	社会教育課 文化財担当 係 長	森 実 秀美
(平成8年度)	社会教育課 課長補佐兼文化財担当係長	古 賀 幸信
	社会教育課 文化財担当 主 事	奥 村 俊久
	社会教育課 文化財担当 技 師 補	藤 尾 薫
	社会教育課 臨時職員	中 富 貴代美
試掘調査	社会教育課 文化財担当 技 師	草 場 啓一
発掘調査	社会教育課 文化財担当 主 事	奥 村 俊久
	社会教育課 文化財担当 技 師 補	藤 尾 薫

現場作業員 石川裕子、岩本雪子、江藤忠造、近藤修司(京都産業大学)、桜谷猛、桜谷きみ子、
州崎裕子、田川直美(福岡大学)、田中紀美子、堤百合子、投野博、那須宣彦、
那須律子、榎本佐智雄、満生勉、満生宏弓、宮本信子、(順不同、敬称略)

室内整理作業員 北野正子、鶴浄美、松石かおる、松尾敦子、山内妙子、宗和代(敬称略)

今回の発掘調査において下見隣保館、及び地元の住人の方々には多大なるご迷惑をおかけしました。誠に有り難う御座いました。

II 立地と環境

下ノ原遺跡は筑紫野市大字下見188-1他に位置する。

筑紫野市は、北の福岡平野と南から延びる筑紫平野の接点に位置する。西からは背振山塊、東から三郡山塊が迫り、帯状に狭長な平野部が存在する。この平野部を鷺田川や宝満川が南北に貫く。鷺田川は御笠川の支流で博多湾に注ぐ。また、宝満川は筑後川の支流で有明海に注ぎ、この地域はそれぞれの河川の分水嶺となっている。市の北部は推定大宰府条坊の郭内にあり、塔原廃寺、杉塚廃寺が所在する。また万葉集等に詠まれた吹田の湯は、かつて武蔵温泉と呼ばれ今日では二日市温泉として市民に親しまれている。

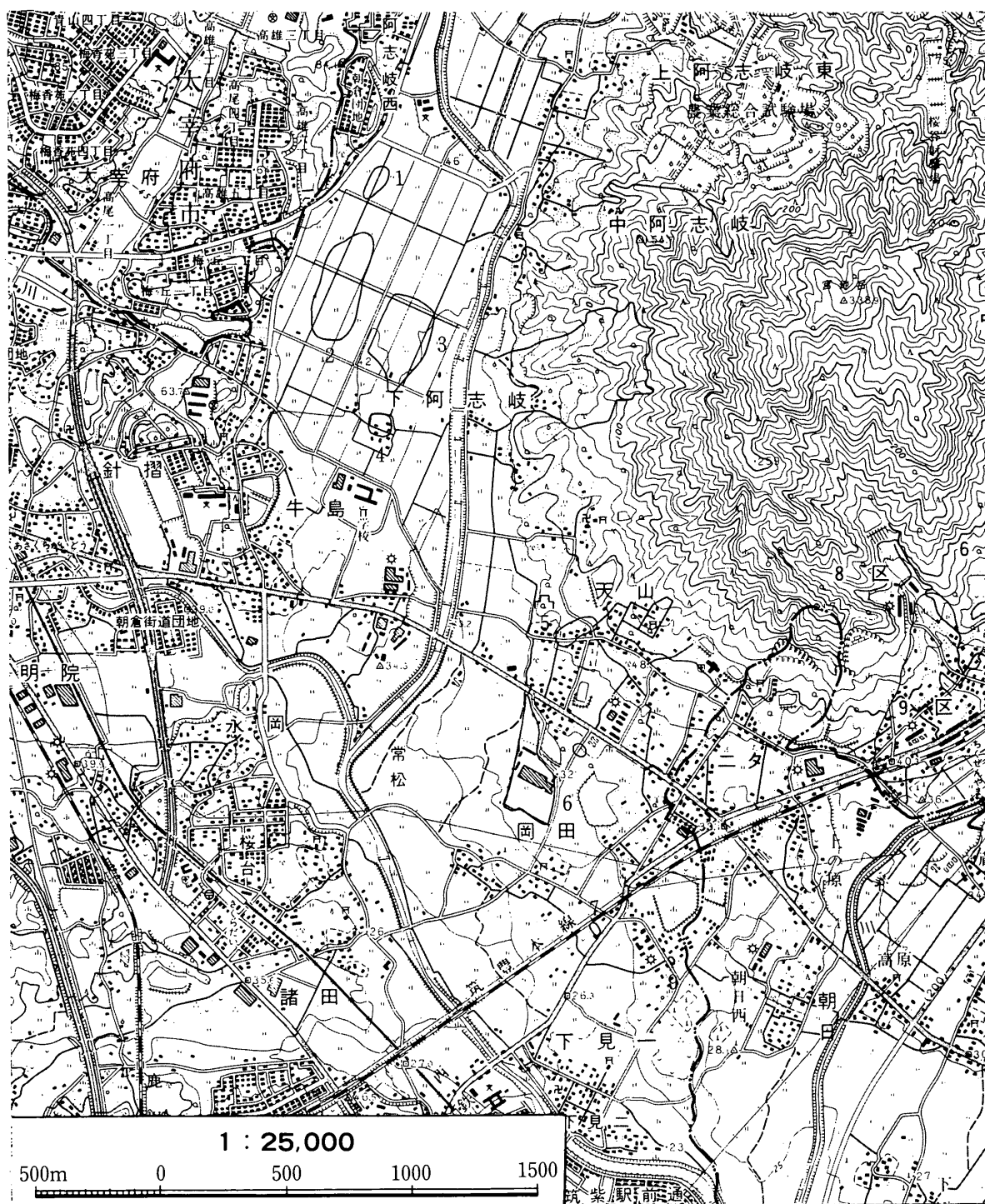
本遺跡は、市の北東に所在する宮地岳(339m)から夜須、三輪町にかけて、段丘が比較的良く残っており、本遺跡は低位段丘の先端部に所在する。この付近は、近世から近代にかけて長崎街道、薩摩街道、日田街道が交差する地点、北には長崎街道沿いに設けられた筑前六宿の山家宿があり、南西には原田宿が位置する。現在においても筑紫野市と朝倉郡夜須町との境、飯塚方面へ向かう冷水峠の麓にあたる交通の要に位置する。

下ノ原遺跡周辺には様々な遺跡が存在する。宝満川の川沿いからやや離れた所に位置する、弥生時代後期を中心とし奈良時代までの住居跡が検出された浦の原遺跡^(註1)がある。また宮地岳には円紋や盾が描かれた殿様塚1号墳や数多くの古墳、また山家遺跡群が存在する。やや時代幅は広がるが、平安時代までと考えられる八ヶ坪遺跡第1地点と隣接する第2地点からは5棟の掘立柱建物、浮殿^(註2)D遺跡^(註4)では2間×5間の平安時代と思われる掘立柱建物を検出している。大島遺跡第3地点D地区^(註5)から1棟の掘立柱建物1間×2間が検出されている。更に宮地岳の西側裾部には御笠地区遺跡^(註6)が広がる。ここから蘆城駅家と思われる2間×5間の本棟に南側を除く3面に庇がついた掘立柱建物が発見された。

下ノ原遺跡の所在する下見近辺はまだ十分な発掘調査が実施されていない歴史的な空白地帯であった。

註

- 註1 夜須町教育委員会 「浦の原遺跡」 夜須町文化財調査報告書第18集 1990年
夜須町教育委員会 「浦の原遺跡II」 筑紫野市文化財調査報告書第19集 1990年
- 註2 筑紫野市教育委員会 「山家地区遺跡」 筑紫野市文化財調査報告書第19集 1987年
- 註3 筑紫野市教育委員会 「八ヶ坪遺跡」『山家地区圃場整備事業関係埋蔵文化財調査報告書』
筑紫野市文化財調査報告書第23集 1990年
- 註4 福岡県教育委員会 「浮殿D遺跡」『冷水バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 1982年
- 註5 筑紫野市教育委員会 「大島遺跡」『山家地区圃場整備事業関係埋蔵文化財調査報告書』
筑紫野市文化財調査報告書第23集 1990年
- 註6 筑紫野市教育委員会 「御笠地区遺跡」 筑紫野市文化財調査報告書第15集 1986年



- | | | |
|--------------|--------------|----------|
| 1. 御笠地区遺跡C地区 | 4. 御笠地区遺跡G地区 | 7. 東遺跡 |
| 2. 御笠地区遺跡E地区 | 5. 柴田城 | 8. 山家遺跡 |
| 3. 御笠地区遺跡F地区 | 6. 日焼遺跡 | 9. 下ノ原遺跡 |

Fig 1 周辺遺跡分布地図 (S=1/25,000)

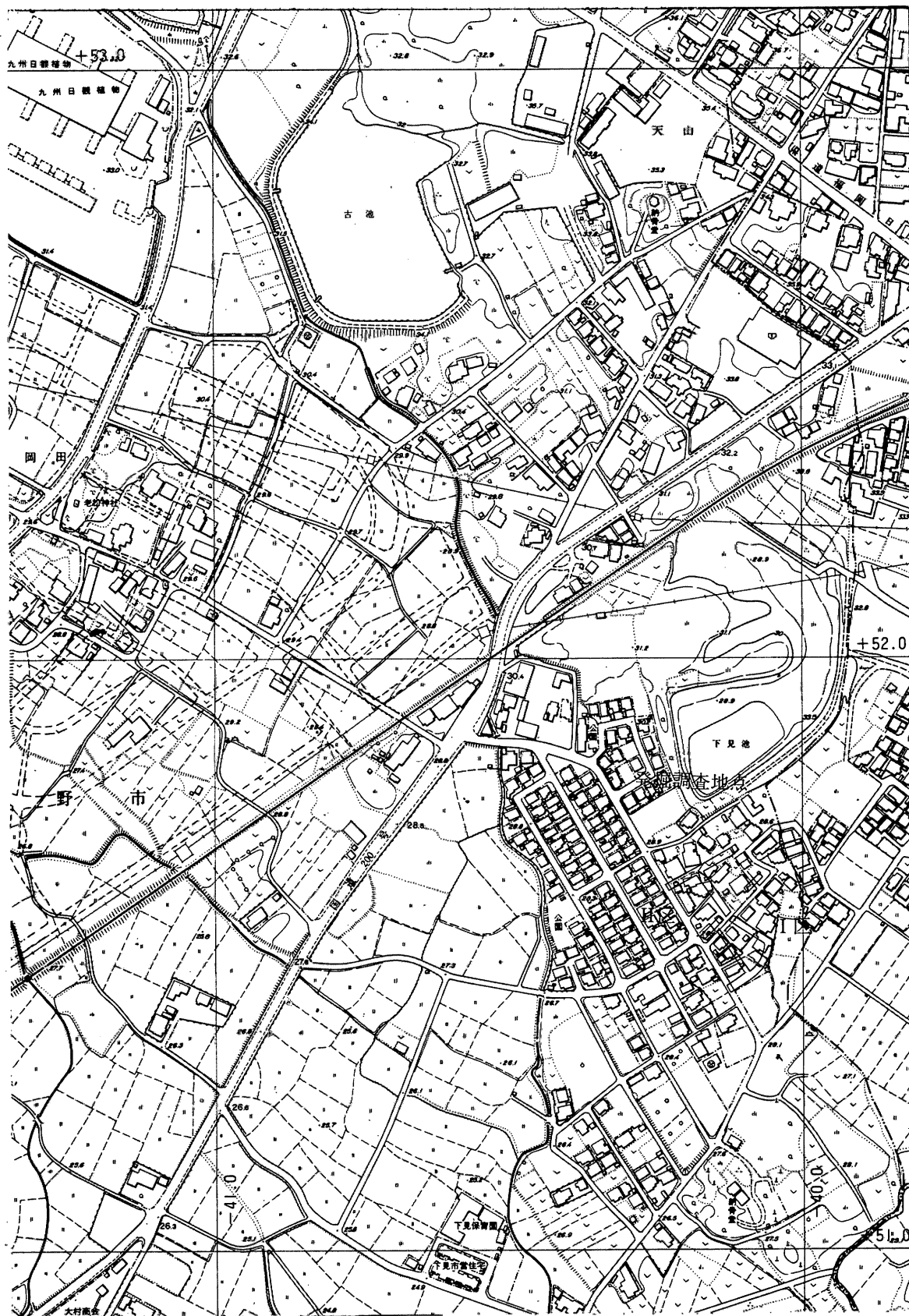


Fig 2 下ノ原遺跡位置図 (S=1/5,000)

III 調査の概要

下ノ原遺跡は小集落改良事業に伴い道路部分の幅5m、全長約220m、面積約1.100㎡を発掘調査し、調査区中央を南に分断する市道を境に便宜上、東側をI区、西側をII区とした。

調査地は低位段丘が東から西へと続き、I区とII区は約2m比高差がある。また遺構検出面もI区は暗黄褐色砂質土、II区は明黄灰粘質土と異なる。遺跡は近年にかなり削平を受けており、ほとんどの遺構は浅く残りが悪い。遺構は、土壇2基、溝11条、畝状遺構6条、及び多数のピットを検出したが、溝、畝状遺構は地元の人によると昭和22年頃まで存在した畑の跡かと思われる、ほとんどがI区に位置する。ピットは柱穴と思われるものは確認できなかった。土壇2基のうち、SK1土壇は土師器の甕の口縁を合わせた状態で、SK2土壇は埋土中から遺物が浮いた状態でそれぞれ出土した。

SK1土壇 (Fig 3, 図版3)

調査区II区東寄りに位置する。表土を剥いだ時点で遺物を確認した。平面プランは、不整楕円形で長軸0.99m・短軸0.57mを測り、土壇底面に甕を埋置するための、長軸0.51m・短軸0.27mを測る長楕円形プランの掘り込みを有し、西側に浅い掘り込みを有する。現存する深さは、約15cmとかなり削平を受けている。埋土は暗黄褐色粘質土。土師器の甕が2個体出土するが、甕の口縁を合わせた状態で横位水平に壇底に接して埋置したものだが、削平により半裁されている。便宜上、東の甕を1、西を2とした。甕の主軸はN-79°-W。供伴遺物は検出されなかった。

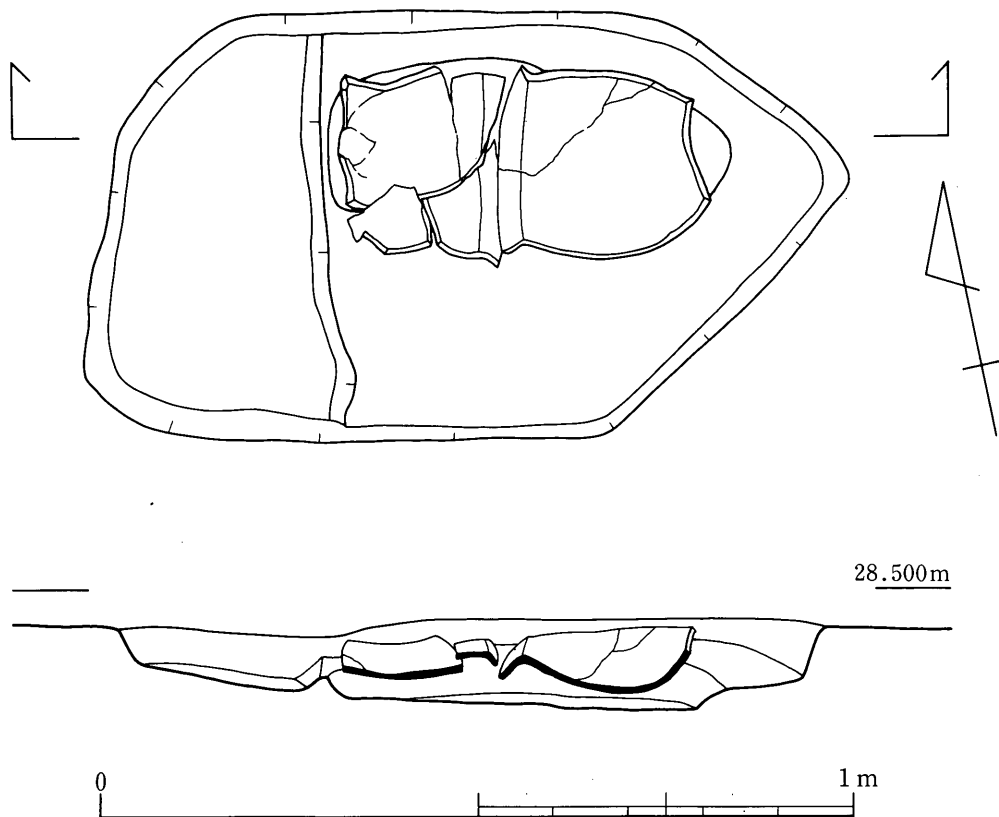


Fig 3 SK1土壇実測図 (S=1/10)

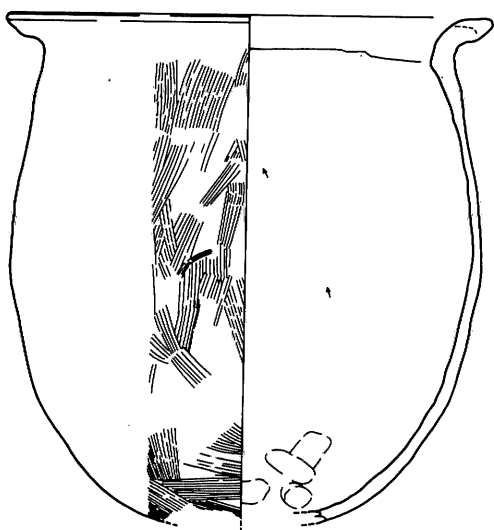
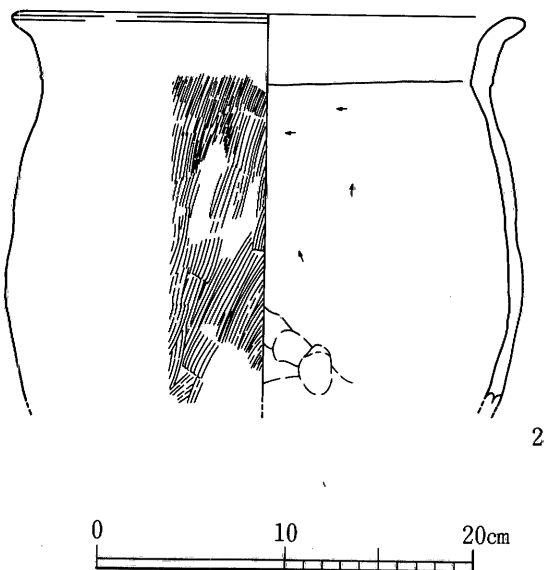


Fig 4 SK 1 土壙出土遺物 (S=1/4)



SK 2 出土遺物 (Fig 5, 図版 5)

SK 2 土壙出土の甕である。口径27.2cm、残存器高20.9cmを測る。胴部最大径よりも口径が大きく、口縁下胴部との境の稜は明瞭。外反する「く」の字口縁を持ち、内外面共に横ナデを施す。外面は縦方向のハケ目を施す。内面調整は磨耗が激しいが、口縁下から底部までヘラケズリで仕上げられる。また同一個体と思われる底部の小片には指頭痕がある。

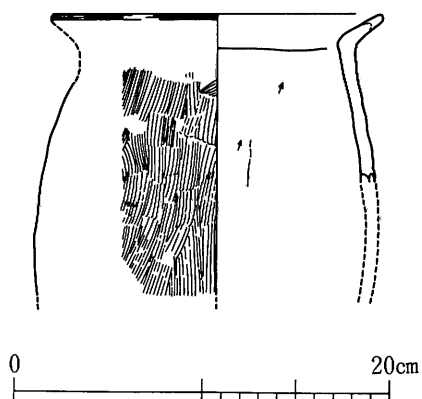


Fig 5 SK 2 土壙出土遺物 (S=1/4)

SK 1 出土遺物 (Fig 4, 図版 4)

1は口径25.8cm、残存器高27cmを測る。胴部最大径が口径よりも大きく、口縁下胴部との境の稜は明瞭である。口縁は外反する「く」の字口縁で、調整は内外面共に横ナデを施す。外面は頸部から縦方向のハケ目が施され、胴部下底部上部の位置から不特定方向のハケ目へと変る。内面は磨耗が激しく明瞭さを欠くがヘラケズリを施し、底部付近に指頭痕があるのがかろうじて分かる。底部は欠失しているが丸底を呈すと考えられる。2は口径27.2cm、残存器高20.9cmを測る。底部は丸底をなすと考えられるが欠失している。胴部最大径が口径よりも大きく、口縁下胴部との境の稜は明瞭で内外面共に横ナデを施す。調整は1とほぼ同じ。ただ内面調整は1よりも磨耗が激しくほとんどヘラケズリは確認できない。焼成はやや悪い。

結

下ノ原遺跡は前述したとおり、遺物出土状況が図示できる遺構はSK 1 土壇 1 基であった。出土した土師器甕は干潟Ⅲ-A式に比定され、8世紀前半に位置づけられるが、全体的にやや後出的な形状を示す。またSK 2 土壇は干潟Ⅲ-B式に比定される。

さて、SK 1 土壇のような古代の土師器の甕の口縁を合わせた状態で出土した例は、近辺でも福岡市で発見されている。更に近畿以北の類例の中には土師式合口甕棺墓と呼ぶものもあり、墓制の一部としてとらえられている例もある。東北地方の合口甕棺墓として沼山源喜治氏はその知見を以下のように示している。

- (1) 一般に集落が営まれるような平坦な台地上に存し、集落に伴って、発見されるものと集落とは無関係に単独で発見されるものとがある。
- (2) 外形については顕著な墳丘は認められず、地表下に埋納されている。
- (3) 1 基だけ単独で営まれ、墓域を形成するような群集は認められない。
- (4) 遺構の多くは平面楕円形で、船底状壇底の土壇に合口甕棺を横位に水平に埋置したもので、土壇には特に施設が認められない。
- (5) 棺に用いられる土器は甕棺用に作ったのではなく日常使用からの転用品が目につく。
- (6) 甕棺の大きさは口径が20～25cm、2 個の総長が60～75cmの範囲内である。
- (7) 副葬品等の伴出遺物は皆無のものが多く、土師器杯形土器等が散見する。

以上の特徴は地域的な背景を考慮して検討する必要があるが、本遺跡をこれに当てはめると(5)(6)においては該当し、一般的な日常用器からの転用品である。(7)は供伴する遺物はなかった。逆に(1)は少なくとも調査区内では住居跡等は確認されておらず、集落とは一定の距離をもつと思われる。(2)については削平を受けているために、(3)は部分的調査であるために、(4)は船底状壇底とはやや言い難く、それぞれ不明瞭な点が多い。

また甕棺とした場合は沼山氏も認めているようにその法量から多少の疑問が残る。これについては幼児が埋葬に当たっての特別な扱いをされたあらわれ、もしくは成人の改葬用のものということも想定されているが、福岡周辺の甕は器高30cmに及ばない程度のもが多い。以上のことから墓とする積極的な根拠に欠けるために現時点では棺と明示しにくい、このような遺構は凡日本的な視野でとらえる時期にきているのかもしれない。

今回の調査はトレンチ状に面積1,100㎡という狭い範囲を調査したことから、十分な全体像がつかめなかったが、今後下見周辺の調査によりこの地域の歴史が明確になる事を期待する。

註

- 註1 福岡県教育委員会 「干潟遺跡Ⅰ」福岡県文化財調査報告書第59集 1980年
註2 註1と同じ
註3 福岡市教育委員会 「博多47」福岡市埋蔵文化財調査報告書第396集 1995年
註4 沼山 源喜治 「土師器合口甕棺墓について」『考古学雑誌第66巻第4号』昭和56年
註5 註4と同じ

参考文献

栃木県考古学学会・栃木県立博物館

「第5回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における奈良・平安時代の墓制」1995年

飯山市教育委員会 「北原遺跡調査報告書」 1980年

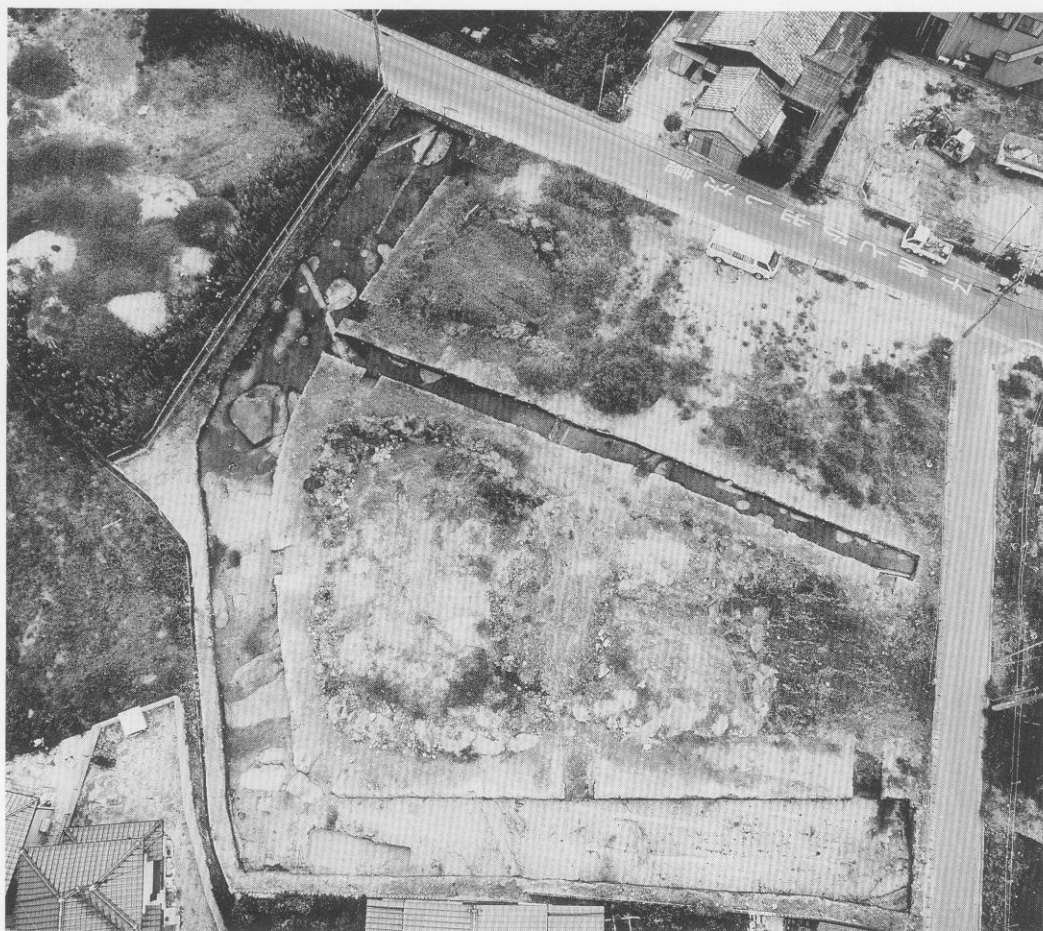
新潟県教育委員会 「一之口遺跡西地区」 『上越市春日・北地区発掘調査報告書II』1986年

一志郡嬉野町 「天花寺山調査報告書」

山田良三 「土師式合口甕棺墓について」『橿原考古学研究所論集4』 1979年

両角守一・堀内千万蔵 「1種の合口甕を出したる松本市宮淵遺跡に就きて」『考古学雑誌』17-11 1927

図 版



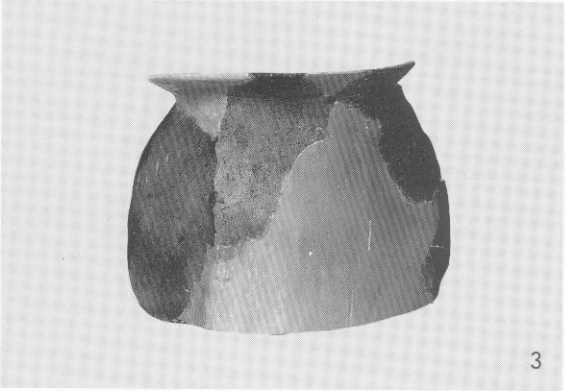
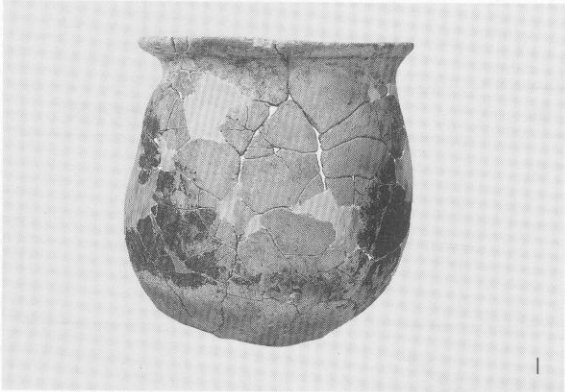
調査区II区
(上空より)



調査区I区
(南西より)



SK I 土壙(西より)



1 SK I 土壙出土遺物 1

2 SK I 土壙出土遺物 2

3 SK 2 土壙出土遺物

4 表採資料

フリガナ	シモノハルイセキ							
書名	下ノ原遺跡							
副書名	福岡県筑紫野市所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 53 集							
編著者名	奥村 俊久・藤尾 薫							
編集機関	筑紫野市教育委員会							
所在地	〒818 福岡県筑紫野市大字二日市753-1 TEL092-923-1111							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
シモノハル 下ノ原	チクシノシ 筑紫野市 オオアザシタミ 大字下見 188番1他			33度 28分 12秒	130度 33分 39秒	19960801) 19960920	1,100	小集落 改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
下ノ原	埋文	奈良	土壇 2		土師器			

下ノ原遺跡

福岡県筑紫野市所在遺跡の調査
筑紫野市文化財調査報告書 第53集

平成9年3月31日

発行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会
福岡県筑紫野市大字二日市753番地の1

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
福岡県福岡市中央区天神5丁目4-16

下ノ原遺跡遺構配置図(1/200)

